



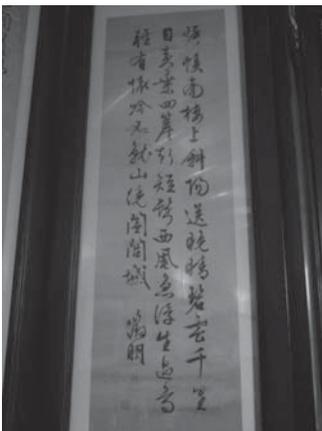
三

特集  
二

## 東日本大震災

### における東北の書道現状

太平洋側 500km に及ぶ地域が破壊された東日本  
特に東北地方の被害は甚大である  
その被災した東北地方の書道事情を取材した



八

探索  
六

## ぶらり街散歩

### ～書体を巡って～

街を歩けば、至るところに漢字がある  
その街の中で気付かない場所にある漢字から、目に  
しているがちょっと変わった書体まで探し歩く

十  
谷  
湾  
編

考察  
十

## 王羲之

### の再考

書聖として、今も尚語り継がれている王羲之  
その王羲之本人については、様々な視点から考察されている  
その考察の紹介と、著者が考える王羲之について語る



十六

紹介  
十四

## お勧め書道用具店

### ～横浜&町田編～

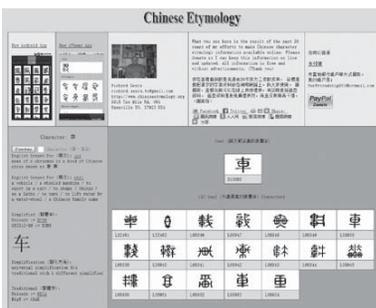
全国で経営されている書道用具店  
年々、書道用具店が減っている今日、その中でも筆者がお世  
話になっている店舗を紹介

書籍  
十六

## Book Review

### ～書道を知りたい人に勧める本～

一般書籍と異なり、書道の本質を語る本はあまり多くはない  
そこで、書道の歴史や書道を独自の考えから本質を突いた本  
を紹介



十八

報道  
十八

## 書体 News Watch!

### ～古典漢字に 20 年を費やした西洋人～

2011 年の孟春、突如として現れる西洋男性が作成した漢字  
サイト  
作成されたサイトとその作成者の背景を追う

感想  
十九

## ～編集後記～

仙台駅前 Loft にて撮影



# 東日本大震災 における

## 東北の書道現状

(取材日：2011/5/2～5/4)

### 爪痕と苦悩

今年の九月には震災より半年が経つ。

筆者がゴールデンウィーク中に被災地を訪れた。福島県新地町の釣師浜に住む七〇代の女性は、かつて自分が住んでいた家の土台を見ながら震災当時をこのように語ってくれた。

「地震が起きた直後、瓦が落ちて、壁が接がれた。だから、慌てて机の下に避難したのよ。

揺れが収まって、外をみると、自分のところだけ瓦が落ちてる。何事かと近所を見て回ってたら、いつも声を交わさないはずのご近所さんに『津波がくる！早く逃げるべ！』といわれて、慌てて車で一緒に逃げた。津波がきてから、役場の一階まで海水がきたけども、二階に逃げて、自分

# ぶらり街散歩 ～書体を巡って～

## 書体探し

漢字といえば、東南アジアの各国に必ずあるといっても過言ではないだろう。今では、西洋でも先進国であればみることが可能である。

日本は古くから文化として漢字を取り入れ、これを利用してきた。今では言葉を扱うには無くてはならないものとなっている。その漢字の歴史は甲骨文字から始まり、今もつとも使われている書体、楷書に至るまで、とてつもなく長い歴史があるのだ。しかし、漢字の起源がいつなのか正確にはわかっていないという。古いもので篆書の歴史が語られているが、篆書のルーツは中国・秦代（前二二一～前二〇九）の始皇帝によるものであるということである。

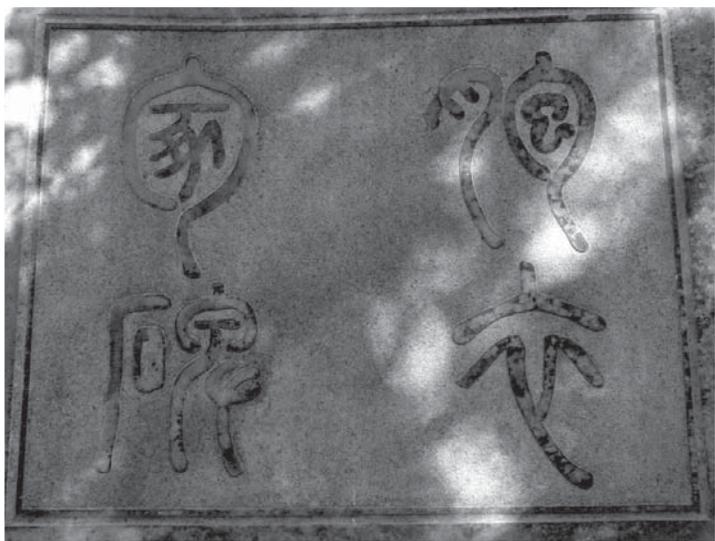
己の人生だけでは到底足りないくらいの年月をかけ、今も尚増え続け、消えていく漢字であるが、そんな漢字も街をぶらりと歩けば、興味を惹かれる漢字

に出会うことがある。さて、そんな街に潜む様々な漢字を探ってみよう。

## 根津神社散策

東京都文京区東部の地区にある根津神社。この神社は鳥居が何重にも渡って、トンネルを作るように並べられていること有名だろう。

そんな根津神社で左のような書体を見つけた。四文字で記述されているこの石版はパッと見ただけではただのミミズが這つ



たような文字にしか見えない。しかし、右斜め下の画数が少ない文字を参考に、筆者が愛用している『新書源（二玄社）』を捲って調べてみた。

この書体は、『説文篆文』の書体であることが分かった。楷書で示すなら『衣』という文字である。

残念ながら、筆者の能力不足ということもあり、他の文字がどのような文字なのかを辞典から調べ上げることが出来なかった。

根津神社におかれた石版  
一文字だけ判別し、説文篆文であることが分かった

次に、右の写真を見て戴こう。この写真は根津神社の狛犬が立っている像の土台に掘られた書体である。何とも、派手やかな書体だろうか。恐らく、この書体も『説文篆文』であると思われるが、も



根津神社の狛犬の像の土台に刻まれた文字  
筆者の力では判別が不可能であった

し違ふとしたら『六書通』の書体であると考えられる。筆者は全力で辞典で探してみても、結局この書体はなんであるのか分からずじまいであった。左の文字の部首外の文字は『尤』の形を為しており、『彪』の『説文篆文』に近い形をしている所までは突きとめた。後は、辞典をじっくりと一ページずつ捲って調べれば、恐らくどのような文字なのか判別できるのではなからうか。

# 台湾編！ ぶらり街散歩

二〇一一年三月七日から筆書は  
中華民国（以降、台湾）を訪れた。  
台湾は中華圏であり、街全体が当  
然の如く漢字で溢れている。

その中で、筆者が台湾の街（台  
北および仇分）をぶらりと散歩し  
た際に見つけた書体を紹介してい  
こう。

## 台北の散策

台湾台北市は台湾の首都であ  
る。この地は学生の方々が非常に  
多く、若者の街という印象を受け

た。しかし、そんな若者街も各所  
に観光スポットが多数存在する。  
こうした風景は東京と同じである  
う。

さて、左の写真は台北市内にあ  
る景福宮というお寺の一室に展示  
されているものだ。『功弘大道』  
と記述されているこれは、『壮麗  
功労な道徳』といったものだろう



功弘大道の一部  
軽やかな筆遣い  
か。

つまり、人生の  
糧となる非常に有  
り難い道徳を述べ  
たものだというこ

文の意味が分らなくても、何とな  
く悟りかけてくるような感覚に  
なってしまうのは筆者だけだろう  
か。

次に、左の銅像の写真を見て戴



景福宮の一室に展示されている功弘大道  
景福宮の建立は 1875 年と歴史ある寺

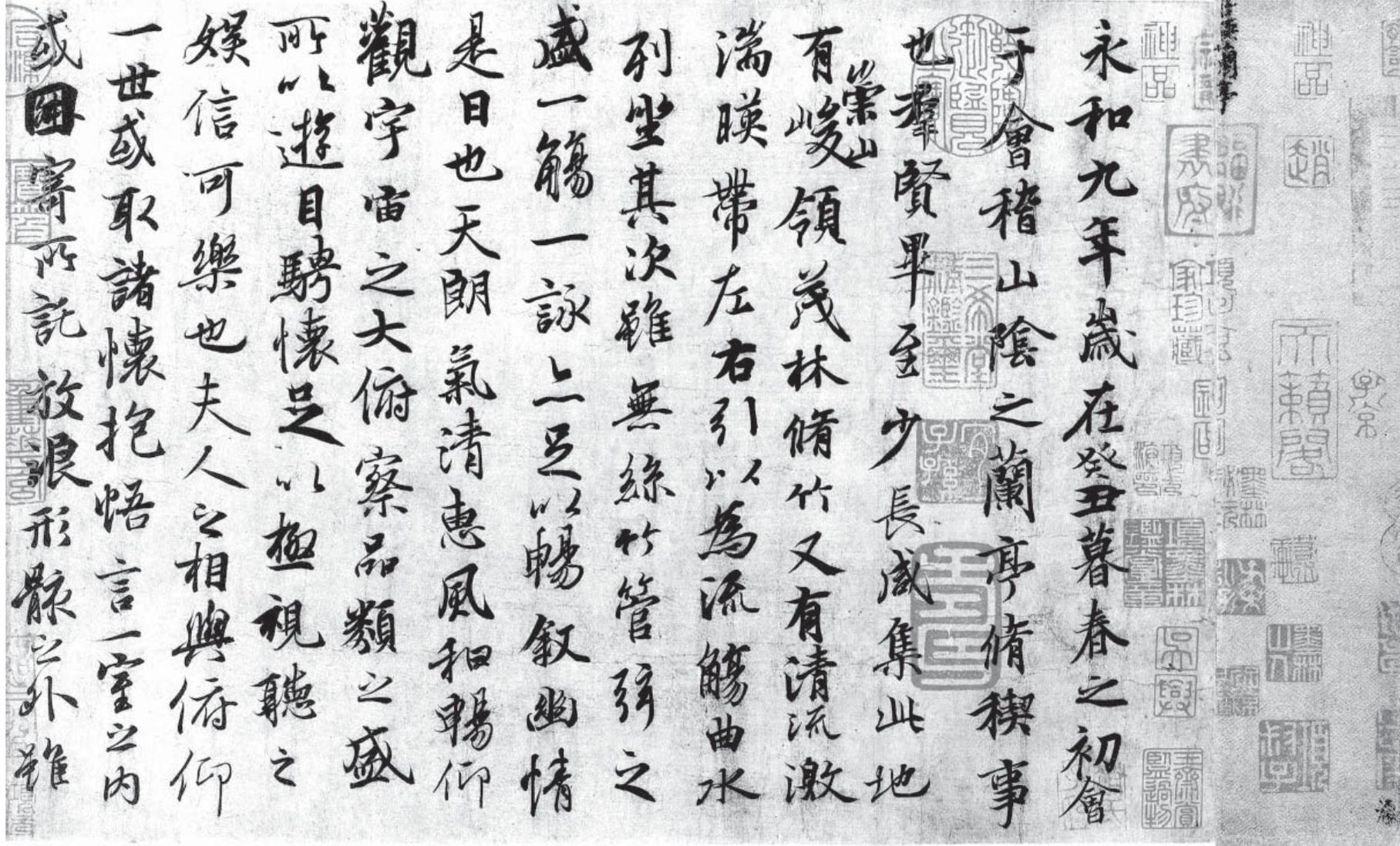
とが理解できる。上の写真は全体  
の写真の一番右の書を撮影したも  
のだ。この書は一見してみると行  
書に見えるが、草書も混ぜた、行  
草書である。筆遣いは筆全体を上  
手く用いて、軽やかに筆を運ばせ  
ている印象が強い。書譜に似たそ  
の筆遣いは筆者は好きである。さ  
て、書体であるが、この書は上手  
い具合に王羲之、孫過庭の書法を  
織り交ぜているように思われる。

るに歐陽詢が一番近いと思われる  
が、残念ながら古典  
の書法に当てはめる  
ことが難しい書体で  
ある。しかし、この  
文字以前に文章は、  
昔から引き継がれて  
きた台湾のイデオロ  
ギーを放ち続ける力  
を持っているものと  
考える。



中正紀念堂 蒋介石の上部に政治理念  
台座には遺言が刻まれている

が、残念ながら古典  
の書法に当てはめる  
ことが難しい書体で  
ある。しかし、この  
文字以前に文章は、  
昔から引き継がれて  
きた台湾のイデオロ  
ギーを放ち続ける力  
を持っているものと  
考える。



# 王羲之の再考

## 書道の最高峰

書道を学ぶにあたって、まず何を学ぶべきなのと問えば、書道を学んでいるものは十中八九が『王羲之』を学べという

だろう。この考えは、確かに間違っていない。過去から現在までの書道史をみれば周知の事実であろう。

では、なぜ王羲之を学ぶことが書道を学ぶこととなるのか。

これについて一言で言えば、『王羲之は書聖であり、歐陽詢、虞世南、褚遂良もこれらを臨書していた。即ち、書は王羲之を学ぶことから始まる』

ということである。

この一言は私的な言葉であるが、他の論文などを拝読しても、最終的に大半の論文はそこに帰着するだろう。

さて、この考えは書道界において、あらゆる種の宗教的な思想と似ており、信奉されてしまっている。

本来であるならば、王羲之本人の書論

を直接臨書すればよいのであるが、現存している王羲之の書論等はすべて臨模されたものである。

この臨模された王羲之の書論、例えば、蘭亭序でいうと、欧陽詢や褚遂良の揮毫による蘭亭序に王羲之の残映を求め、修練を重ねる。つまりは、王羲之から直接ではなく、その書を学んだ者から我々は王羲之を学んでいるということになる。これは、判然としない王羲之であると言わざるを得ない。

しかし、書人として書聖の規範としての観点からみれば、王羲之の文字の規範及び書法を相伝するという書人の法範を負い、王羲之の意志を継ぐものとして役目を果たしているならば、その考えも決しておかしいものではない。伝承とは事実、そういうものである。しかし、王羲之の意志そのものを完璧に引継ぎ、王羲之としての役目を果たすことも、また不可能である。

現代まで語られてきたそんな王羲之の不思議に迫ってみる。

是日也天朗氣清惠風和暢仰觀宇宙之大俯察品類之盛所以遊目騁懷足以極視聽之娛信可樂也夫人之相與俯仰一世或取諸懷抱悟言一室之內或因寄所託放浪形骸之外雖

永和九年歲在癸丑暮春之初會于會稽山陰之蘭亭脩禊事也羣賢畢至少長咸集此地有峻領茂林脩竹又有清流激湍映帶左右引以為流觴曲水列坐其次雖無絲竹管弦之盛一觴一詠一足以暢叙幽情

是日也天朗氣清惠風和暢仰觀宇宙之大俯察品類之盛所以遊目騁懷足以極視聽之娛信可樂也夫人之相與俯仰一世或取諸懷抱悟言一室之內或因寄所託放浪形骸之外雖

永和九年歲在癸丑暮春之初會于會稽山陰之蘭亭脩禊事也羣賢畢至少長咸集此地有峻領茂林脩竹又有清流激湍映帶左右引以為流觴曲水列坐其次雖無絲竹管弦之盛一觴一詠一足以暢叙幽情